

I ニュータウン開発地域における植物社会学的調査の意義

今まで我が国で第二次大戦后行なわれてきた住宅団地やニュータウン建設は、最小限の予算と空間で、いかにして最大限の人口をつめこめるかという、時間を停止したその時点での機能主義、効率主義、経済主義があまりにも重視されていた。したがって、ニュータウン建設、団地づくりの必要条件は、経済性、便利性、せつ的な能率性が中心をなしていた。またニュータウン建設に際しても戦后初期の時代には、科学的な客観調査を十分行なう余裕はなかったようである。

その後より経済効率を上げるため経済的調査、次いで交通、さらには地質調査なども行なわれるようになった。しかしこれらのニュータウン建設に際しての調査は、非生物的なサイドか、機能的サイドからのアプローチ、住居環境の形成にもっとも重要な人間の持続的な生存環境の保全、保証に対しては科学的な、あるいは生態学的な注意があまり払われなかった。

結果的には各地のニュータウンに見られるように、かつての竹林や雑木林とは打って変って、既存の地形も植生もさらに動物群集も改変、消滅させてしまうほどの大規模なニュータウンに変えられていった。しかし、このような景観の画一化、貧化がもたらされると、効率的で機能的な便利さとはうらはらに入居者の持続的な生活環境としても、あまりにも画一的で、周辺自然环境の変形、消失による植物砂漠的な高層スラム化をもたらす危険性が強い。

どれほど効率的で便利で経済的な住宅団地やニュータウンが建設されても、そこに入居して生活する人たちが、その周辺に以前から住みついていた人たちとの社会的な連帯感の欠如に象徴されるような精神的な環境の荒廃と同時に自然環境の破壊が健全な肉体健康の維持にさえ、深刻な阻害要因になってくる。

同様にしばしば表面的な美化運動ととりちがえた、緑化も表土の無計画な廃棄、埋没、潜在自然植生を無視した外来種や、外来牧草の吹き付け、長もちしないいわゆる急速緑化樹のまばらな植栽、管理費が半永久的に嵩み、防音、集じん、空気の浄化などの環境保全機能は常緑広葉樹の自然林の30分の1しか効果のないと言われる芝 (H. Ellenberg 1973 3. 講演要旨) などがわずかに植えられているにすぎない。

これからのニュータウン開発に際しての基本哲学は、そこに住み生活する人間は、どれほど文明が進み、技術が革新されても、きわめて保守的な生物社会の一員にすぎないという冷厳な事実の再確認にある。入居者も地域住民もすべて、生態系の一員としての生きものであり、多様な生物社会、バランスのとれた生態系のシステムの枠内で、持続的に健全な生命が保証されていて、そこではじめて人間固有の文化を創造し、さらに発展することができる。したがってニュータウンはいつの時代にも生態学的な基礎に立脚した生物学的な自然と人間の共存関係の樹立、健全な存続を前提としなければならない。

自然環境のバランスを破壊しないで、自然の許容範囲の中で、時間の経過と共に、より安定し、発展するニュータウン、住宅団地の建設に際しては色々な対象に対して各種の調査が考えられる。しかし、基本的には、植生調査が先行しなければならない。植生は生態系の中で唯一の酸素、有機物の生産者であり、自然状態では消費者としての人間、動物の総和の2,500～3,000倍といわれるくらい、量的には最も多い。しかも多摩ニュータウン予定域のほとんどすべてが冬も緑の常緑広葉樹林域に含まれるため、四季を通じて吸音、吸じん、空気の浄化機能をもあわせ有するのは、潜在自然植生の許容する自然林である。さらに郷土種のシラカシなどの常緑広葉樹は、根が直根性で深く、乾燥に耐え、地震にも倒れない。したがって、単に多様な環境保全機能、緑の景観形成者であるばかりでなく、地震に対しては逃げ場所、逃げ道ともなる。常緑で火を遮ぎり、すでに古くから多摩地方の農家の屋敷林として発達しているシラカシ林のように火事に対しては防火壁の役割も果す。

さらにもっとも重要なことは、その住民と数千年来共存してきた郷土種による郷土の森は、同時に大部分は現在の潜在自然植生とも一致する、もっとも適確で総合的な生命集団の側からの生きた警報装置である。すなわち、移動能力のない郷土の森に代表される持続的な植生は、そのまま生育している場所の、現在人間が計量化できない、まだ知り得ない要因も含めた、過去から現在までの環境の変化、悪化の総合指標となる。

重要なことは、計画者や実施者がこのような生物が生命をかけて行なっている実験結果、環境の変化を読みとる力をつけることである。

植生を使つての自然環境の診断、ニュータウン建設に際して積極的な環境創造を行なうためには、もっとも重要な基礎調査として、植物社会学的、生態学的な十分な調査、研究が前提となる。

植生科学、植物社会学的な調査は、立地の質に応じて現地主義に徹して進められなければならない。非生物的な工場製品を利用する際には、一度現物を見ておけば、あとは同一製品、同一規格のものを発注すればどこでもおなじものが発注どうりに供給される。

しかし、自然は多様であり、広い地球上に厳密に見れば同じ場所は2つとない。生物社会はさらに多彩である。ほんのわずかな立地条件にも微妙に対応し、その場所固有の植生や生物社会を形成している。したがって、人間も含めた生態系や生物社会の動態、秩序性、環境との適合性などを調査する際には生態系の基本構成者である植生の調査が前提となる。

同様に植生を利用して、豊かな住宅環境、ニュータウンの景観を創造、形成するためにも、植物社会学的な十分な調査・研究がきわめて重要な処方箋、診断図となる。

すでに20数年来西ドイツ、オランダ、スイスをはじめチェコスロバキヤ、ポーランド、フランスなどヨーロッパ諸国、アメリカ、ソ連でも広く行なわれているニュータウン建設に際しての植生学者による植物社会学的、生態学的なアセスメント（事前調査）が、我が国ではまだ本格的に行なわれ、充分利用された例はきわめて少ない。

世界一の大都市東京都が、これから開発、建設する多摩ニュータウン西部地区は建築学的にはもとより、生態学的にも世界の模範となるような理想的な建設がのぞまれる。

東京都南多摩新都市開発本部で計画、実施されている多摩ニュータウンの建設に際して、2ヶ年間にわたる植物社会学的な本格的な調査が行なわれたことは、生命集団の側からの新しい建設に際しての一応枠組みがつくられたものといえる。

現地植生調査、複雑な組成表組み替え作業による群落組成表の作製、植生図作製指針の作製、さらに現地踏査を中心とした現存植生図、潜在自然植生図の作製を行い、植物社会学的な本格的調査法にもとづく調査・研究結果が本報にまとめられた。

まだ不十分な点も少なくないが、現段階での植生学的調査の総合成果がここに考察されている。これからの住民のための間違いの少ない、よりよい郷土づくりを前提とした世界の模範となるようなニュータウン建設の処方箋として、本調査結果が、ニュータウン計画、実施、さらに利用者たちに理解され、正しく、十分に利用され、より健全に明日にむかって安定し発展し得る、一見古くて、実はもっとも新しいニュータウンが建設されることが強く期待される。